

## 原発と人間 (Nuclear Power and Humanity)

多喜百合子

競うように暴れて毒を吐き、  
枕を並べて熱に浮かされる、フクシマの1-4号機。  
熱さましの注水が汚染水を生む。  
新たな注水を不要にする作業のためには  
強い放射線が立ちはだかる。  
放置すれば破局。  
この事故で大幅にあげられた放射線限度の値すら越して  
被曝してしまった作業員たちがクルマに乗せられて 出ていく。  
報道のカメラから顔がみえないように 幕が張られた。  
テレビニュースでは 男性 Aさん40代 男性 Bさん30代 のように  
読み上げられた。

被曝量が国の定めた限度をオーバーしたその日から  
名前も顔もふせられる。

人間の労働を  
被曝量測定単位のシーベルトだけで  
評価する  
寒々とした世界。

一定以上の被曝量に達した原発労働者は  
使い物にならないとみなされて  
即お払い箱。

一回限りで使い捨てされる  
放射線防護服とおなじ。

原発が安全に動いているときでさえ  
点検の作業員は いつも少しずつ被曝することが 避けられない。  
原発は 原料のウラン採掘の時に始まって  
ずっと  
誰かが被曝し続けることを  
前提としなければ  
成り立たなかったのだ。